The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

印度學佛教學研究第五十七巻第二号　平成二十一年三月

曹洞禅の発展と梅山門下

大塚将弘

はじめに

現在の東海地方において、拙論で取り上げる梅山門下は曹洞宗の教線拡張に大きな影響をもたらした。その祖師梅山聞本は太源宗真の法嗣であり、峨山下では通幻派に次ぐ第二の門派である太源派の主流をなした。中世曹洞宗教団の飛躍的教線拡張の基礎を築いた梅山聞本とその門下の行実は、如何なるものであったかを考察することは宗派全体の発展にも連なる要素であると考えられ、日本禅宗史における曹洞禅の意義を考える上においても主眼となるものである。

梅山門下と在地的政治勢力との関連性、および化導の方途として授戒会を頻繁に催行していたことなどは鈴木泰山氏、[1]広瀬良弘氏や[2]中嶋仁道氏[3]の研究により明らかにされている。

そこで、拙論では輪住制に着目し、特に尾張乾坤院を例に挙げ総持寺・竜沢寺との相違を考察する。輪住に際しての人選を尾張地方だけではなくその範囲は広く各地から用いていたと考えられ、門派の基盤を固めるのに寄与したとともに、独自の発展形態を構築していった。これらは在地的政治権力と曹洞禅の日常化及び民衆化運動と併せて、教線拡張の礎となったと推察される。

一　梅山の行実

その梅山聞本であるが、美濃の生まれで、はじめ律院に投じて出家し諸方遍歴の後、加賀仏陀寺の太源宗真に参じて遂に印可を受けて、その法を継いだ。ここでの問題点は、なぜ梅山は律院を辞して禅門に入ったのかである。

竹内弘道氏[4]は梅山が律院を辞する際の事情については一様ではないと指摘している。

『延宝伝灯録』はこの間の事情を記さず、ただ仏陀寺の太源に参じたとし、さらに『本朝高僧伝』では梅山本人の内的契機によるとしか解することは出来ないと指摘している。しかし、『日域洞上諸祖伝』と『日本洞上聯灯録』はこの事情

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

について、律師の遷化に遭うという外的契機があったことが記されているとし、さらに『日本洞上聯灯録』には太源に参ずる前に建仁寺に入って衣を改めた、としている。この事情については若干の矛盾が生じていると竹内氏は指摘している。ただ梅山の内的要因だけであったのか、もしくは、外的要因も付加されているのか、これらの事情を探ることは梅山の宗風を考究する上で一つの基礎となりうるものであると考えるが、拙論では究明できなかった問題点として今後の課題としたい。

さて、梅山は永徳二年（一三八二）に越前の竜沢寺に開山として招かれて、その門葉を伸張させる拠点を確立した。次いで加賀に金剛寺を開き、更に総持寺に住するも、まもなくして竜沢寺に隠棲している。

遠江大洞院の勧請開山となり、多くの優れた弟子を育成した。その梅山の宗風は特に太初継覺、傑堂能勝、恕（如）仲天闇の三師によって曹洞宗地方発展の一翼を担っていくことになる。

その一人傑堂能勝は越後に梅山を開山に迎え耕雲寺を開き、さらに越後の南に雲洞庵、東に慈光寺、西に種月寺などを開創し、越後を中心に伸長していった。

この曹洞宗発展期における曹洞禅の思想的変容は如何なるものがあったのか、その一つに傑堂能勝の法嗣である南英謙宗が挙げられる。南英謙宗は、当時の五位に乱れがあるとして、それを正すために文安三年（一四四六）『重離畳変訣』を著している。この中で南英は批判の対象を明峰下の諸師、また、臨済宗から顕われた五位の解説書としている。つまり、峨山下通幻派の諸師においても師の説を継承するのみであり、南英は曹洞禅においての独自性をもたすべく五位の研究努力し、真意を究明しようと試みたと考えられる。

このように、曹洞宗教線拡張の時期においての思想的変容を見受けることができ、禅思想の再構築という思想的活動も一部では行われていたことを意味する。

二　大洞院六派と教線拡張

では、曹洞禅の飛躍的発展において、対外的活動は如何なるものがあったのであろうか。それは政治勢力により外護されてからの世俗教化の中に仏教を樹立せんとする実践活動に他ならなかったと考える。即ち曹洞禅の日常化運動及び民衆化運動である、その特徴的活動として上げられるのが恕仲天闇である。恕仲は信州海野氏の一族で遠州飯田城主である山内対馬守崇信の外護を受け応永八年（一四〇一）崇信寺を、応永十八年（一四一一）遠江に橘谷山大洞院を開創し、本師梅山聞本を開山としている。恕仲とその門下は特に東海地方を中心に発展し拡張していくことになる。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

これら大洞院恕仲門下からは優れた六師が育ち「大洞院六派」としてその門風を弘めていくこととなる。

『可睡斎起立並開山中興之由来略歴』[5]にも記されるように六師を派祖として、遠江を中心に教線拡張すべく活動を起こす根源となった諸師を指している。

ここに大洞院六派について略説する。

『日本洞上聯灯録』によると、

喜山派　喜山性讃は信濃に生まれ、恕仲に参じてその印可を受け、会下に首座を勤めて、応永一九年（一四一二）に備中洞松寺を開き留まること三一年に及び、嘉吉二年（一四四二）に示寂した。

真巌派　真巌道空は河内の生まれで、当初密教を学んだ。恕仲が近江洞寿院を開創し、改衣帰投してついに印可を受け、洞寿院第二世となり法幢を高揚した。

不琢派　不琢玄珪は越後に生まれ、恕仲に嗣法して遠江雲林寺を開き教線を発展させた。

石叟派　石叟円柱は越前の生まれで、竜沢寺梅山聞本の元で落髪し、その後恕仲に侍してその法を嗣ぎ、崇信寺に留まり、総持寺に昇任し大洞院に住した後、再び崇信寺に帰り長禄元年（一四五七）に示寂した。

物外派　物外性応は信濃の人で、恕仲の法を嗣いで総持寺に昇任し、大洞院、竜沢寺を歴任住したが、応永末年（一四二〇頃）、今川仲秋の帰依を受け、仲秋の父、前遠江、駿河守護今川了俊（貞世）を開基として海蔵寺を開いた。

大輝派　大輝霊曜は尾張の人で初め儒学を学ぶが、禅門を志して恕仲に参じて印可を受けて、大洞院、仏陀寺などに歴住し遠江円通院を開創して恕仲を開山に請じた。文安三年（一四四六）に示寂した。

これら大洞院を中心とした梅山門下は化導の方途として授戒会を頻繁に催行していたことは、鈴木泰山氏『曹洞宗の地域的展開』や広瀬良弘氏『禅宗地方展開史の研究』の研究により明らかにされている。

さらに授戒会の催行については、諸師の宗風、関係性とともに地域の状況が大きく関わっていたと考える。

例えば、尾張乾坤院で授戒会が催行されると、遠く越後より南英謙宗の俗弟子が参加するが、これら乾坤院二世逆翁宗順と南英との関連性は如何なるものであったか。その一つには逆翁宗順が先に述べた、南英の『重離畳変訣』を書写していることから、五位についての研究が盛んであったと考えられ、逆翁の師である遠江一雲済の川僧慧済は『人天眼目』を注釈するほど五位に詳しかったゆえとも推測できる。

しかし一方では備中に赴いた喜山性讃、近江の真巌道空、喜山の弟子霊嶽洞源の法嗣で美濃に赴いた月泉性印を引請師、また戒師として見出すことができず、やはり地域の状況を把握した上での考察が必要になると考える。

さらに、地域的政治勢力の立場から観ると、尾張乾坤院は水野氏の帰依を受けていたが、この水野氏は承久の乱において京都側に味方して、領地のすべてを失い熱田社領の在地荘

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

官として復興している、この熱田神宮は足利氏と関わりが深く、応永十六年（一四〇九）に四代将軍足利義持、長禄二年（一四五八）に八代足利義政、永正十四年（一五一七）に一二代足利義晴が社殿の造営を成していることなどから、足利氏と親密な関係を築いていた遠江大洞院と尾張乾坤院とを近づける要因の一つとして考えられる、さらに同じ曹洞宗においても水野氏と敵対関係にあった吉良氏の帰依を受けていた浜松普済寺といった、寒巌派を避けていたことも地域的考察において重要な点である。

結語

曹洞禅発展において門派による輪住制も大きな要因である。[6] 竹内弘道氏は梅山の師、太源宗真が峨山の後を継いで総持寺第三世となったことは総持寺の輪住制の初めてであると指摘しており、そして総持寺は五院による輪住制となる、この流れは太源派及び梅山門下にも伝承され、竜沢寺や大洞院でもなされていくことになる。遠江大洞院では三年での輪住制であり、主に直末を中心に行われた。しかし尾張乾坤院においては形態が異なっており、その期間は二年間と短く直末だけではなく、孫末の寺院にも範囲を広めて住持を選任し、地域は三河にも広がっている。乾坤三派の門葉の広がりとともに各地の門派寺院から基盤を固めたと考えられる。しかし、他の寺院においてこのような形態が存在していたかは拙論では究明できなかったことから、今後の研究課題としたいと考える。

曹洞宗発展の基礎基盤を構築する上では先に述べた地域的政治権力と民衆化運動と併せて教線拡張の礎となるものである。

1　鈴木泰山氏『曹洞宗の地域的展開』（思文閣出版　平成五年）
2　広瀬良好氏　『禅宗地方展開史の研究』（吉川弘文館　昭和六十三年）
3　中嶋仁道氏『道元思想のあゆみ2＝南北朝　室町時代＝』（吉川弘文館　平成五年　四五一頁～四六七頁）
4　竹内弘道氏『道元思想のあゆみ2＝南北朝　室町時代＝』（吉川弘文館　平成五年　三八五頁～三八七頁）
5　鈴木泰山氏等『可睡斎資料集　第一巻』（思文閣出版　平成元年　三頁）
6　竹内弘道氏『道元思想のあゆみ2＝南北朝　室町時代＝』（吉川弘文館　平成五年　三九三頁）

〈キーワード〉　梅山聞本、南北朝、輪住制、大洞院

（愛知学院大学大学院）

NII-Electronic Library Service